

## 菅原道真研究 『菅家後集』 「504官舎幽趣六韻」の詩情一考察

一五句目「此時傲吏思莊叟」十二句目「優於誼舎在長沙」の出典をめぐって一

### 序

今回対象とする「504 官舎幽趣六韻」は、この詩に秘められた菅原道真、作者自身の真意がどのようなものであるのか、又何を詠じようとしたのか、その点一つに限っても深く考えさせられる作品のように思える。

この詩に触れている先人の考察の例を二、三紹介すると次のようなものがある。

#### (一)川口久雄氏（岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』「504官舎幽趣」補注七 七三八頁）

ここで自分の方がまだしもまだというのは賈誼のところへ、凶鳥といわれる鵬（みみずく）がとびこんできた。そして長寿を得ないことを予見して「鵬鳥賦」を作ったのであるが、道真の太宰府では、そういうこともなく幽閑をたのしむことができることを思っていましたか。しかし実は賈誼よりも道真の方が悲惨だったようである。

#### (二)清藤鶴美氏（『菅家の文華』「68官舎幽趣」三二五頁）

謫居二年目ごろからの道真の詩には、以前の激越な口調、呪うがごとき口吻は影をひそめる。この詩のごと